

モンテッソーリ教育とマヤ暦(続き)

4. 観察について

集中することの幸せ

マリア・モンテッソーリの言葉「集中している子供はとてつもなく幸せなのです」を出発点に、集中・没頭の意味が深く掘り下げられています。没頭するとは「時間を忘れ、我を忘れる」状態であり、エゴが消えることで閃きやインスピレーションが生まれるといいます。東大・京大生が優秀なのも、頭がいいからというより、この「集中によって時間と自我の概念を飛ばす」力に長けているからだと言明されています。

没頭できるものを持つ人——仕事でも趣味でも、人への奉仕でも——は幸せになりやすい。本研修自体も、参加者が時間を忘れるほど没頭できる場にしたいという講師の思いが語られています。

観察する癖が運と幸せを引き寄せる

モンテッソーリが特に重視したのが「観察」という姿勢です。アメリカの大学の研究でも、「自分は運がいい」と感じやすい人には観察する癖があるというデータがあると紹介されています。観察することで細かいことに気づき、人の気持ちや痛みにも敏感になれる——それが気遣いや人間関係の豊かさにもつながるといいます。

「見る」と「観る」の違い

「見学の見」と「観察の観」は意味が根本的に異なります。「見る」は目に見えるものを確認する行為であるのに対し、「観る」は見えないエネルギーや本質を感じ取る行為です。「察」は察知・察するという、感じ取る力を意味します。つまり観察とは、表面の言動ではなく、その根底にある意図や動機を読み取ろうとする姿勢であり、子育てにも人間関係にも欠かせない力だと強調されています。

モンテッソーリ自身も、牢獄にいる親の子どもがパンくずを拾っている光景を観察した際、「食べ物を欲しがっているのではなく、指先を使いたいのだ」と本質を見抜いたエピソードが紹介されています。

観察は「気づき＝悟り」への道

観察の意識が高まるほど気づきも増える、そして気づきとは悟りに等しいと講師は述べています。自分の内側ばかりに意識が向いていると幸せになりにくく、観察は「外に意識を向ける象徴的な行為」として、内と外のバランスをとるうえでも重要だと説かれています。

5. 自由と規律

自由には責任が伴う

モンテッソーリ教育における「自由と規律」は、ただの自由勝手ではありません。ルールをしっかりと守ったうえでの自由であり、「自由には責任がある」というのが根本的な考え方です。講師の研究会も、創設当初から一貫して参加者の自由意志を尊重しながら、自由と責任はセットであるという姿勢を大切にしてきたと語られています。

縦と横の関係

人間関係を「縦と横」という軸で解説しています。アドラー心理学では「すべての人間関係は横(対等)であるべき」と説かれています。縦の関係の中で培われるリスペクト・尊重・礼節も大切であり、「リスペクトなき横の関係は崩壊する」と講師は指摘します。親しき中にも礼儀あり—この日本の言葉も、横の関係における礼節の大切さを示すものです。縦(宇宙・神との繋がり)と横(人間関係)の両方が揃うことで、初めて自分の存在位置が定まるという考え方が示されています。

選択と責任感を育てる

モンテッソーリ教育の特徴の一つが、乳幼児の頃から「選択させる」ことです。生後数ヶ月の子どもでも、2つのおもちゃを前に置いて自分で選ばせる—この習慣が責任感を育てます。人に言われてやったことには責任感が生まれにくいのに、自分で選んだことには「自分の責任で決めた」という自覚が自然と芽生えるためです。

日本の教育では親が気づかないうちに誘導・コントロールしてしまいがちですが、コントロールしてよいのは他人ではなく「自分自身の我欲や勝手な思い」だけだという考え方が示されています。

自己肯定感との関係

自己肯定感が高い人は困難を乗り越えやすく、幸せになりやすい—この観点からも、モンテッソーリ教育は子育てに限らず、大人が自分の肯定感を高める学びとしても価値があると締めくくられています。責任感の強い人が増えれば、社会全体が良くなるという大きなビジョンも語られています。
